

日本を見つめ直し、楽しく生活、仕事しましょ、シリーズ。

李氏朝鮮末期は財政が破綻し※1、18世紀産業革命以降、世界の人口は急速に増加していたにもかかわらず飢餓による人口減少が続き※2、三政の紊乱(びんらん)と呼ばれる不正・腐敗・秩序の崩壊により民は塗炭の苦しみに晒され、内乱が頻発するようになります。

- ※1 例えば1907年必要な歳出3000万円に対して、歳入は748万円しかなく、その差額は全額日本の財政(税金)で賄われました。1907年～併合1910年だけでも**1億400万円**が補填されました。当時の1円は現在の3万円程度の価値です)
- ※2 1777年人口**1804万人**から1877年**1689万人**100年間で**6.8%**減少、日韓併合時1910年人口**1313万人**、1877年と比べ**33年間で22%**の減少(韓国文教部指導書 1989年)

そもそも、李氏朝鮮は1392年、独立国であろうとした高麗が、失われた遼東半島を取り戻すべく中国の明に侵攻している時に、右軍司令官の李成桂が明の朱元璋と内応し高麗王を殺害し明の隷属国※4として始まったため、他の者のフーデターを恐れるため自国の橋を破壊したり、通商の基本となる道路などのインフラの整備をせず、愚民政策をとりました。また、明を支配していた**朱子学**※5を導入し、民の土地を没収し、科田として、王族、両班に再配分し、商業・技術者を蔑視し、社会の活力が次第に失われていきました。

- ※4 **迎恩門**(韓国史跡33号)に中国の使者を迎えた時、明の時代は**五拝三叩頭の礼**、清の時代は**三跪九叩頭の礼**を朝鮮国王が使者に対して行っていました。
叩 = 額を床に打ち付ける 跪 = ひざまずく
- ※5 儒教原理主義と言われ、生まれながらの人の階級・序列は絶対的なもので異をとねえることは禁じられ、働かざることを徳とし、商業、技術者を蔑視し、他の学問、思想を弾圧したために硬直的な社会となり、近代化を阻害する大きな原因になりました。

西洋列強国による植民地政策と、日本・清・ロシアの勢力争いにおいて、朝鮮自らが独立を保つためには国力を高めるために近代化が必要でしたが、近代化の二度の気運、**1884年**、金玉均による**甲申**(こうしん) **事変**が李朝の清への軍派遣要請で失敗、**1894年**から**1895年**、金弘集らによる**甲午**(こうご) **改革**がロシアと結託した守旧勢力によって失敗したことにより、朝鮮を近代化するチャンスは李朝自らで葬り去られました。

1905年明治38年、7月27日、当時の総理大臣、桂太郎とアメリカ特使ウイリアム・タフトの間で、アメリカは、朝鮮が再び清やロシアなど単独で他国と結び日本の安全保障が脅かされる場合、再び日本が戦争を余儀なくされることを理解し、朝鮮への指導的地位を認めました。また、日本はアメリカのフィリピンの植民地化を認め、**桂タフト協定**が締結されました。

8月12日、**第二次日英同盟**で、イギリスは日本の朝鮮支配権を認め、日本はイギリスのインドへの特権を認めました。

9月5日、日露講和・**ポーツマス条約**で、ロシアは日本の朝鮮における排他的優先権を認め、11月17日、**第二次日韓協約**において朝鮮(当時大韓帝国)は日本の保護国(自治権は認めている)となります。

以後、朝鮮半島の近代化がはじまりますが、日韓併合(大韓帝国は日本国となり、韓国国民は日本人となる)に関して日本の国論は二分していました。